

“医者神様”だった時代の私

乃木坂スクール#9「発信力を磨き・想像力を磨いて、医療を変える・福祉を変える」

新宿げやき園にて、嶋田昌功

私自身、今回の講義紹介されていた乳がんの方たちと似たような経験をした。

私は生まれながらに身体的な障害を持つ、肢体不自由者である。私たちが幼いころは歩くことが素晴らしいこと、歩くためにどうにかするという時代であった。外科的治療やリハビリテーションによって何とか歩行をできるようにするというのが主であった。

しかし、私が外科的治療、手術を受ける時、医師からはまともな説明がなかった。

医師は私や家族には良いことしか言わず、この手術をすれば良くなるという説明だけであった。その時は家族も「この先生が言うんだから」となってしまう。もう50年くらい前になるが、手術をして歩けるようになるのか切ってみないとわからないという時代であった。

後々になって私の周りの人とは「医者神様になった」と笑ったくらいだ。医師の意向に従っての治療、“医者神様”であったため、看護師やリハビリテーション職のスタッフにも「先生が言ってるんだから」と言われ、手術を勧められた。

たとえ周りのスタッフ、特にリハビリテーション職が手術に対して疑問に思ったとしても、医師の治療方針は絶対というのがあり、口出しすることはもってのほかであった。

私は、過去を思い返しながらか聴講していた。

現代の医学界ではインフォームドコンセントが基本であることは、講義でも紹介されていたし、私も様々な場所で耳にしてきた。

では、私が手術を受けた時代はどうだろう。インフォームドコンセントが十分でないことは、火を見るより明らかである。仮に当時、私が十分な説明を受けたとして拒否できたのだろうか。時代が悪かったのではなく、その場で言われたら自分の意思で拒否できたのかと思う。

インフォームドコンセントが重要だと言うが、一番重要なのは当事者が理解できるかは別として、その時点での情報は提供し、本人に決断させることが重要なのではないか。

説明する側は当事者が理解できるように説明すること、本人にどうやって理解してもらって、決断を下すことができるようにするというところに力を注がなければならないのではないだろうか。制度に従ってすることは当たり前であり、問題は中身ではないだろうか。本質の部分をしっかり見ることができなければ、成長はないし、発展していくことは難しいように感じる。

今回の問題はまだ発展途上であり、これから多くの当事者の意見を聞き、議論を重ねていくことで、より当事者の立場に近づけるように、これから進めていくことが望まれると思う。

(聞き手：社会福祉法人 邦友会 新宿げやき園 作業療法士 森実愉)